

一農本主義者の思想と行動

——橘孝三郎の「革新」的生涯によせて——

小 松 和 生

目 次

はじめに——問題の所在——

I 思想の背景——「現代への懐疑」——

- (1) 思想的基点——ニーチェの影響と「自己の超克」——
- (2) 思想形成の多様性

II 思想基盤の構築——「現代の超克」への試み——

- (1) 兄弟農場の経営
- (2) 権藤成卿の影響と農本主義
- (3) 愛郷会の結成

III 『農村学』の提起と政治運動

- (1) 『農村学』の概要……………（以上本号）
- (2) 昭和恐慌と農場経営の行詰まり（状況の変化）
- (3) 愛郷塾の結成と愛郷会の政治的進出（変化への対応）

IV 『日本愛国革新本義』の提起と「国家改造」運動——「現代への反逆」——

- (1) 非合法運動への転換
- (2) 『日本愛国革新本義』の概要
- (3) クーデター計画の実行とその結末

V 天皇主義への帰結——挫折と非合理主義——

- (1) 5・15事件以降の軌跡と天皇主義への純化

(2) 『皇道文明優越論』とその概要

むすび

はじめに——問題の所在——

農本主義とは、農業を重視し、何らかの形で農業を立国の基礎にしようとする思想と運動である。言うまでもなく、農業は、主権をもった一つの独立国であるならば、国民の食糧の安定供給をめざすためにも、また緑や水を守って国土を保全するためにも、工業とならんで国の基幹産業として位置づけられるべき産業であり、またそのためにも農業経営の安定が保障されなくてはならないであろう。

農本主義者たちの農業論も、一見したところ、このような農業＝基幹産業論にきわめて類似していたが、両者が根本的に相違する点は、農本主義の思想と運動が本質的に階級闘争と相容れない立場であり、自治主義を唱えてはいても民主的要素をほとんど包含していなかったところにある。昭和恐慌以降は、その立場をさらに推し進めて、北一輝らの「国家改造」論や軍部「革新」将校たちと結びつき、天皇制ファシズムを実現することによって、自らが理想とするアナクロニズム的な空想的農村社会を実現させていこうとするに至った。ここで論じる橘孝三郎は、その代表的な農本主義者にほかならない。

もともと農本主義における農業とは、地主的支配下の小農制農業であり、したがって階級対立を超克し、一体化された村落共同体社会を前提とするものでなければならなかった。その意味で、資本制生産が成立し発展していくにしたがい、農本主義における農業と村落は、漸次その内部矛盾を顕在化し激化させていかざるを得ない。この矛盾の噴出こそ、村落支配層にとっての最大の危機であり、農本主義思想を生み出し支える深部の基底となったのである。そして

農本主義思想を正当化し権威づけるために依拠し回帰しようとしたのが、国体であり天皇制イデオロギーにほかならなかった。⁽¹⁾

このような農本主義の歴史的流れについてみると、まず明治初期の本源的蓄積期においては、国家収入の中で地租が圧倒的地位を占めるという財政状況の中では、農業が立国の基礎でなくてはならず、かくて前田正名や品川彌二郎らの思想的鼓吹によって、真っ先に村落指導層＝地主階級がその影響を受けていった。次いで明治30年代から大正期になると、漸次、資本制生産の成立・展開から工業の優位性が明らかとなり、国民食糧供給産業としての農業という発想の転換と、急速な帝国主義化の進展にともなう国防的意義としての農民重視という発想とが、とくに日清戦争後においては谷干城、日露戦争後では横井時敬などによって主張されるようになる。このような農本主義の思想は、上層地主の寄生化と地主層の分化によって、主に中小地主に受け入れられていったのである。ところが、第一次世界大戦期から昭和初期にかけては、資本制生産における独占体制が確定され、工業と農業の矛盾の激化によって村落の支配関係の矛盾をさらに激化させる。ここに農本主義は、地主－小作の対立関係を否定し、その焦点を都市と農村の矛盾・対立関係に外らせていくことに転換した。したがって、その思想の鼓吹対象が中小地主から小作層にまで至る全農民・全村落を包含することにおかれた。農本主義と本質的に相容れない階級闘争＝地主制打破の立場は否定され、共同体的慣行の維持を前提とした自治主義・勤労節約主義を中心として、専ら反都市、反中央集権、反近代化などが主張され、自救主義、自力更生、理想村落の建設などが唱道されたのである。この時期の代表的イデオログこそ、対都市（対商工業資本）の拠点で帝国農会や産業組合においた岡田温であり、自治・自救主義を主張した権藤成卿である。⁽²⁾

こうして昭和恐慌期に至るが、ここに至って農本主義が否定した村落におけ

(1) 山崎春成「農本主義論の問題点」(『経済学雑誌』43巻5号16～21頁)参照。

る階級闘争＝小作争議が一層激化し、農業危機はさらに深化する。この危機に触発されるかのごとく登場するのが橘孝三郎であり、そして愛郷塾の結成であった。そこで、橘孝三郎についての若干の研究史をふりかえり、それらの諸研究において、橘の思想と行動に関してはどのような性格規定がなされているのかをみておこう。

まず、丸山真男は、橘の思想と行動のパターンを「北一輝型と権藤成卿型との折衷」であり、「日本ファッショの標準型」であると規定する。⁽³⁾次いで橘川文三によれば、農村恐慌の衝撃をうけて『農本主義』という限定詞を付けられる超国家主義者になった⁽⁴⁾と言ひ、また松沢哲哉は、橘の生涯を「萌芽・自立」から1930（昭和5）年以降の「発展」、1932（昭和7）年からの「飛躍」、1933（昭和8）年以降を「転生」ととらえ、橘自身については、「〈発達統御〉論派」に「競合対立的地位に立った」「〈原始回帰〉論派」として「一種の修正資本主義を主張した」人物と評価している。⁽⁵⁾さらに小林英夫は、井上日召や権

(2) 明治以降の農本主義論の流れについては、安達生恒「農本主義論の再検討」（『思想』423号）参照。同論文は、奥谷松治「日本における農本主義思想の流れ」（『思想』407号）および桜井武雄「昭和の農本主義」（『思想』407号）が、農本主義思想を絶対主義の基盤擁護のイデオロギーとし、権力的把握で裁断しようとしているのに対して批判し、思想における発想の変化とそれともなう受け手の変化という視点を重視すべきであるとしている点については評価できるが、「権藤成卿や橘孝三郎などの右翼狂信主義者」（63頁）と一方的に極め付けている点については、本論を通じて論じていくようにいささか疑問である。少なくとも権藤は1920年以降の代表的農本主義者であったと言えるのではないだろうか。

(3) 丸山真男『増補版現代政治の思想と行動』49～50頁。

(4) 橘川文三『近代日本政治思想の諸相』233頁。

(5) 松沢哲哉「橘孝三郎——日本ファシズム原始回帰論派」17～9頁。詳細な研究で、きわめて参考になるが、ただ橘たちの思想を含め、「ファシズム思想＝革命思想」と自らが同じ視点に立つことを肯定している点は首肯できない（同333頁）。

(6) 小林英夫『昭和ファシストの群像』162・196頁。

藤成卿とともに「現状破壊派」のファシストと規定し、⁽⁶⁾ 齊藤之男の場合は、「東洋思想を基調とする橘の農本主義は、その展開のなかにいくつかの思想傾向を含んでいる」として、橘が関心をもったと思われる思想家を網羅的に追求し、ナショナリズム、アナーキズム、ナロードニキ的思想や東洋思想など、その多様性を指摘している。⁽⁷⁾ 以上の研究史の中で、齊藤と松沢の所説では、橘の思想（齊藤）と行動（松沢）の総覧的な展開がなされており、齊藤の場合、橘が関心をもった思想家を精力的かつ詳細に追求した本格的な研究ではあるが、影響をうけ身につけた思想と、行動の転換や行動の変化における動機とのダイナミックな関連性が不鮮明である。一方、松沢の場合は、自らが主張する橘の「萌芽・自立」から「発展」そして「転生」という思想と行動の転換についての必然性が必ずしも明確でない。

橘は農本主義の歴史的流れの中からみれば、確かに昭和恐慌期に登場した人物であり、とくに5・15事件への参加によってその存在がクローズアップされた農本主義者であった。しかし、単なる右翼狂信主義者でもなければ、「純粹」農本主義者でもなかったことも確かである。橘の思想における発想の変化とそれにもとづく行動の転換とは、きわめてダイナミックで劇的でさえあった。したがって、橘のある特定の時期や段階での思想と行動を裁断して、その性格規定を行うだけでは、その変化と転換の根拠や動機は必ずしも解明できないのである。そこで、小論では、紛れもない農本主義者であり、とくに権藤成卿の農本主義の洗礼を強くうけた橘が、いかにして5・15事件への道に突進していったのか、その思想的背景と変化の契機や必然性を追求することによって、橘の農本主義者としての「革新」的生涯の歴史的意義について、今日の問題をベースに包含させながら追求することを課題としたいと考える。

(7) 齊藤元男『日本農本主義研究』148～54頁参照。ただし、橘が青春期に大きな思想的影響を受けたとされるニーチェや北一輝の分析がなぜ欠落している。

I 思想の背景——「現代への懷疑」——

(1) 青春期の思想的基点——ニーチェの影響と「自己の超克」——

橘孝三郎は1893（明治26）年3月に茨城県水戸市に生れた。生家は紺屋業で小林屋と号し、水戸で5本の指に数えられるほどの資産家であった。1912（明治45）年7月に水戸中学を卒業したが、この頃から高山樗牛などを通じてニーチェの影響を強くうけていたと言われている。1912（大正元）年9月に一高文科乙類に3番の成績で入学したが、のちに詳述するように「哲学研究」の結果、1915（大正4）年に中退する。この一高時代に、北一輝『国体論及び純正社会主義』などを読み耽けり、そのほかにカント、ヘーゲル、ウィリアム・ジェームス、アンリ・ベルグソン、エドワード・カーペンター、ホイットマン、クロポトキンなどにも及んだと言う。⁽⁸⁾橘自身も、一高在学中に、「私は文字通り寝食を忘れて哲学研究に没頭した」と語っている。さらに、一高在学中から帰農後の青春期に思想的に接触した思想家としては、橘の著書『農村学』にも引用されているガンジー、シュペングラー、ラスキ、トルストイ（以上第1編）、ケネー、マルクス（第2編）、マルサス、ヘンリー・ジョージ（第3編）などをあげることができるし、また、『日本愛国革新本義』に引用されているペスタロッチやタゴールなども加えることができよう。このうち、マルクスについては、その多くは一知半解的な理解に終っており、しかも、これとて専ら反マルクス主義のためにする読書であったと考えられ、もともとマルクスを正当に、しかも真面目に吸収しようとする意図があったのかどうかさえ疑わしいところがある。

このような反マルクス主義を一筋の糸として、橘の読書領域は広範多岐にわ

(8) 松沢哲哉前掲書36～7頁・45～9頁。

たっており、一見すると雑多でまとまりのないようにみえるが、その読書傾向の基底には、現代（日本資本主義社会）への「懐疑」から、その観念的な、あるいは精神主義とも言える「超克」への試み、そして「現代への反逆」、その結果、当然ながら挫折へと突進していく橋の悲劇的な「革新」的生涯を集約するような思想的選択の特質がみとめられる。すなわち、大まかに見ると、主にアンリ・ベルグソンやウィリアム・ジェームズなどにおいて、その後の思想と行動の前提となるような実証主義的思想方法を、シュペングラーやカーペンターなどにおいては「近代への懐疑」を、クロボトキンやタゴール、ペスタロッチなどにおいては「近代の超克」への試みを、そして北一輝においては「近代への反逆」を、といった橋のそれぞれの個別的な関心事が分類されるのである。そして橋にとっては、それらの思想的関心事を総括的に包含し、かつ橋の青春時代にもっとも印象深く脳裏に刻みこまれたのが、ニーチェの思想であった。言いかえると、橋の青春期における思想的基点と橋の「革新」的生涯を貫徹した思想的基底を、このニーチェにもとめることができるのである。そこで以下、ニーチェ思想の中で橋の関心を引きつけたであろうと思われる論点について、個別的に整理・検討しておこう。

まずその第一点は、「近代への懐疑」から出発して近代ブルジョア道德の偽善について暴露しようとしたことに表われている。たとえば、ニーチェにとって、近代社会とは「理想の偽り」であり「これまで現実に対する呪詛であった」し、「あらゆる理想は必然なものに対する欺瞞であ」った。また「偶像の黄昏——平たくいえば、古い真実が終末に近づいて居」たし、「善き人々——彼等は常に終末の発端」であり、「基督教道德——虚偽への意志の最も悪性な形、人間を変えてしまふ真実のキルケ、人類を腐敗せしめたところのもの」であった。⁽⁹⁾ ニーチェにとって「神は死んだ」のであり、近代ブルジョア社会の理想は

(9) ニーチェ（安部能成訳）『この人を見よ』14～5頁・77頁・164頁・188頁・192頁。

偽瞞であり、その道德は終末でなければならなかったのである。

したがって、第二点は、このような近代ブルジョア社会への懷疑から、近代合理主義そのものへの不信、さらには民主主義や科学的認識に対してすら、懷疑から不信、さらには敵意さえ表わすに至ったことである。すなわち、「民主政治は偉大なる人間に対する、また選ばれたる者に対する不信仰を、『各人は他の各人に等しい』を表現している」、「私は（第一に）社会主義を嫌ひだ。なぜならば、それが全くお芽出度く、『善や真や美』について、また『平等なる権利』について夢想しているからである」、「私は（第二に）議會主義の勢力を嫌ひだ。なぜならば、それは群畜の民衆がよって以て君主等になる為めの手段であるからである」⁽¹⁰⁾等々の政治的ニヒリズムとして表われる。すべての既成の諸權威・諸価値を否定し、民主主義や社会主義を敵視して、さらには大衆蔑視に至る。「人間に対し『愚衆』に対する嘔気は私の危険」であるとしつつ、「群衆については、我々は自然について考へる如く、無遠慮に考へなければならぬ。彼等は種属を保存する」にすぎないとし、「労働者の将来について——労働者は軍人の如く感ずることを学ぶべきである。名誉を、収入を望んでもいいが、賃金を支払はれることを欲しないのだ！」⁽¹¹⁾と労働者を蔑む。こうなると近代への懷疑やその偽善性の暴露も方向を失って、ただ否定の中に収斂されてしまわざるを得ない。

第三点の「近代への反逆」は、したがって否定をひたすら自己目的とする否定の思想たらざるを得ないのである。すなわち、まず「基督教の激烈な敵なる私自身」と自己規定した上で、「独逸的教養の——その『理想主義』の——全然たる無価値」と否定し、「これまで第一流の人間として尊敬せられた人々（中略）私は此等の所謂『第一流』をば頭から人間の中に数へさえもしない、——

(10) ニーチェ（生田長江訳）『権力への意志』下巻640頁

(11) 『この人を見よ』41頁。

(12) 『権力への意志』下巻643頁。

彼等は私にとっては人類の排泄物である」と漫罵し全面的否定する。これに対して「一切価値の転換に於て、一切の道德価値からの脱却に於て、今まで禁止され、輕蔑され、呪詛された所のもの一切に対する肯定及び信任」を与えるとするのである。こうして、「一個の創造者たらんと欲する者は、先づ破壊者となり諸々の価値を粉碎し去るざる可からず」とし、「否定と破壊とは肯定に於ける条件である」とする至る。⁽¹³⁾反知性と反理性とからくる末期症状的ニヒリズムと生の目標を失った小ブルジョアの焦燥感から、否定と破壊を、さらには反革命的テロリズムを自己目的とする。そして、それへの衝動を非合理主義にもとめていくのである。

橋がニーチェにもとめた第四の論点は、生のただ一つの瞬間にせよ、限りなく充実して生きること、すなわち永遠の回帰であった。『『永遠の回帰』即ち無条件に又無限に繰返される万物循環の説』であるが、「基督教道德の発摘は曾てその比を見ざる一の事件である、一つの真実なる破局である。これを明かにする人は、一の優越な力、一の運命であ」らねばならない。⁽¹⁴⁾そして「一切の物は生成し、永久に回帰する——脱出は不可能である！我々に若しも、生存の価値を批判し得たとしたら、その結果はどうなるであろう？回帰の思想は、力（及び野蛮性!!）に奉仕する」とし、「回帰の思想に堪へる為め必要なのは、道德からの自由」であり、「人間の力意識を最も多く高めるもの——超人を創造する」と主張する。⁽¹⁵⁾権力への意志は、その一つの表われがテロリズムであるが、また生への最強至高なる意志でもある。それは戦はむとする意志、打勝たんとする意志にこそ、その真の意義を見い出さなくてはならないのである。ニーチェによれば、人間存在は過渡的存在にすぎず、永遠の回帰は超人、すなわち全世界の王冠にもとめられるものであった、と言えよう。橋も最終的には

(13) 『この人を見よ』39頁・41頁・75頁・128～9頁・183～6頁。

(14) 同上135頁・194頁。

(15) 『権力への意志』下巻882～4頁。

天皇に回帰していくのである。

以上のようなニーチェの思想は、ブルジョア社会の矛盾をつき、それへの「反逆」を試みる者にとって、ある面では恰好の根拠を与えはしたであろうが、しかしプロレタリアートの歴史的役割を否定し、ブルジョア社会のたんなる皮相な批判にとどまったにすぎず、むしろ、その本質が反理性と反科学、反民主主義にこそおかれていたのである。このような「永遠の回帰」を基軸とするニーチェの思想に依拠して現代を「超克」しようとする者は、やがては革命的空文句をとばし、ひたすらテロリズムへの信仰に帰依して、最終的には挫折し、観念的世界に生きつづけていかざるを得ない運命にあったものと言うことができよう。

(2) 思想形成の多様性

① 実証主義と思考方法

ニーチェの中に見出し、ニーチェからひき出そうとした橋自身の関心事である「自己超克」の思想は、一高時代から帰農前後の時期にかけて、個別的に、しかもより一層具体的に以下にあげるような思想家から再認識し、確信を深めていったものと言えるであろう。そして、ニーチェからひき出した近代への懷疑と「自己超克」の思想を、現代日本資本主義社会の超克として再構築していこうとしたのである。その方法的前提がベルグソンやジェームズの実証主義とその思考方法であった。

ベルグソンについては、橋自身が次のようにその認識方法を要約している。すなわち、「我々は現象界に於て、本質的に相異なる対立を認識対象間に画する事が出来る。即ち一は生命を有する物即ち生物であり、他は生命なき物即ち物質である。更に我々は現象界を生命ある物に属するものと、生命なき物に属するものの復次的成立と看做す事が出来ると同時に、現象界を生命ある者の次界と、生命なき者の次界の二に大別して考へる事が出来る。アンリ・ベルグソンは前者に対して活力的次界と言ふ文字を冠し、後者に対しては幾何学的次界

と言ふ文字を冠せしめてをる。所で我々は生命ある物に対する認識と、生命なき物に対する認識に於てまた本質的に相異なる認識方法を以て臨んでをり、且つ臨まねばならん事を学び知る事が出来る。ベルグソンは活力的世界に於て採れる認識方法を直観的方法と称し、幾何学的次界に於て採れる方法を理知的方法と名けてをる。私は感銘的方法と言ふ文字を用ひ、理解的方法と呼んでをる。そして上の哲学的原理に対して私は現象二次性原理と言ふ名称を与えてをる」と¹⁶。つまり、生命ある物に対する認識は直観的方法とし、生命ある物に対しては理知的方法とする、ということである。

ここから、橘は、農業が生命ある物として生産二次性原理を導き出す。すなわち、「現象二次性原理は直ちに我々の経済的生産界へも導き入れられる性質のものたると同時に我々の経済観に対して根本的原理を与ふるものである」とし、また「生産は常に農工による二次性を有するものである。私の称する生産二次性原理と申すのはこれである」とする。¹⁷ 生命をもつ農業と工業との関係は、水道における水と給水工事のようなものとするのである。この生産二次性原理によって、資本主義的工業の進展による農業の衰退（資本主義の破産性）を防止するために、農業重視とその救済論を主張するに至るのである。→高を中退して、帰農を決意する動機も、このようなベルクソン哲学からの影響（橘的解決）に一つの要因があったものとみてよい。

ところで、ベルグソンによれば、生命あるもの（たとえば農業）については、「概念ではただ事象の影を示すに留まるのであるから、概念を以て事象を把握した気になってもそれは無駄である」とされ、「固定した概念を以て動きのある事象的なものを元通り構成する方法は一つもない」とされる。つまり、生命ある物についての認識は、概念や符号は「相対的」で駄目なのである。す

(16) 橘孝三郎『農村学』12～3頁。ベルグソン「創造的進化」（松浪信三郎、高橋允昭訳）（『ベルグソン全集4』253～9頁）参照。

(17) 同上『農村学』13～4頁。

なわち、「相対的なのは既存の概念による、つまり固定したものから動くものへ向ふ符号的認識であって、動いているものの中に身を置き事物の生命そのものを取る直観的認識ではない。この直観は絶対に到達する」。言いかえると、「直観の力によって持続の具体的な流動の中に飛び込めば」とらえられる「事象は動きである。実在するものは、(中略) 変化する状態である」。ベルグソンの創造的進化とは、直観によってのみとらえられる持続の世界である。かくて、「科学と哲学とは直観の中で合致する。本当に直観の哲学ならば、あれほど望まれていた哲学と科学との結合を実現する。それは哲学を実証科学——といふ意味は前進的で無際限に完成されて行く科学——として樹立すると同時に、本来の意味に於ける実証科学にそれらの持っている本当の意味、それらが考へているよりしばしば極めて高い意義の自覚を促す」のである。すなわち直観的認識こそ高い意義の自覚を促がし、「絶対」の把握に到達するというのである。

このようなベルグソンの実証主義、あるいは「哲学は全体的経験と定義することができる」とするような経験論に対して、橘は、自己の世界観を「創造進化的歴史観」と名づけるほどの傾倒ぶりを示し、「ベルグソンによって世界の哲学と更に一般学界に対する根本問題の一たる方法論に於て根本的革命が促されておるものと申していい」と言い切るのである。¹¹⁸このようなベルグソンにみた「革命」も、のちに愛郷会の結成において端的にあらわれるように、それはきわめて精神主義的な「革命」であり、橘独特の農業「重視」論とが結合して、生産諸関係から遊離したあくまで農民中心のアナクロニズム的な農業社会を空想するに至るのである。

また、橘は、「私はかかる方面で最もウィリアム・ジェームズ及びアンリ・ベルグソンに負う所が大である」と述べているところから、¹¹⁹次にはジェームズ

(118) ベルグソン『哲学入門・変化の知覚』(河野與一訳) 20頁・47頁・50～1頁・50頁・44頁・45頁・60頁。

(119/20) 橘孝三郎『農業本質論』34頁。

について若干みておく必要がある。

ジェームズは、「真理は、健かさや豊かさや強さと同じように経験の経過のうちに作られるのである」とし、また「真理は経験の内容に何一つ付け加えない」とする徹底した経験論者であった。さらに、「プラグマティズムの哲学については（中略）事実との親密な関係を保つものである」とし、「プラグマティックな方法なるものは、なんら特殊な結果なのではなく、定位の態度であるにすぎない。すなわち、最初のもの、原理、『範疇』、仮想的必然性から顔をそむけて、最後のもの、結実、帰結、事実に向おうとする態度なのである」として、「プラグマティズムの具体性と事実への近接性ということがプラグマティズムの最も首肯できる特徴である」とするように、「原理」を徹底して排除して「事実」をがむしゃらに主張する実証主義の立場にあった。

ジェームズのこのような実証主義は、また「常識は、われわれが事物を理解するに当っての十分に確実な段階、すなわちわれわれの思惟の目的をじつに見事に達しさせてくれる段階である」とし、「常識が絶対的な真理であることにかつて疑いをさし挿んだことがある者は、詭弁の才にたけた人たち、パークリーのいわゆる学問ずれのした人たちばかりなのである」とするように、社会発展の法則を認識するというような立場とは真向から対立し、遂いには常識が真理であるとまで言い切るのである。意識から独立した客観的实在の存在や、その实在の認識の可能性すらも否定し去る典型的な主観的観念論にほかならなかった。ジェームズにとって「真理とは（中略）具体的に検証された信念」でしかなかったのである。²¹⁾

このようなジェームズの思想は、ベルグソンの思想と相ともなって現代版マッハ主義、あるいは論理実証主義への道を拓くものであったと言えよう。橘は、このジェームズの思想に対して、「いつでもただ事実²²⁾に忠ならん事を最上

21) ウィリアム・ジェームズ『プラグマティズム』（梶田啓三郎訳）160頁・35頁・46頁・56頁・134頁・152頁。

とする」と述べているように、絶大な傾倒ぶりだったのである。しかし、こうしたジェームズの徹底した経験論あるいは実証主義は、近代ブルジョア合理主義の肯定すべき点までも捨象させ、資本主義の搾取・収奪といったプラグマティックな合理主義のみに矮小化させて、やがては、そこから理性そのもののへの不信さえ深めさせる役割を果たすことになる。それは、つまるところ科学に對置した感性の強調、そして民主主義そのもののへの敵対となっていかなざるを得ない。橘の悲劇は、こうした読書傾向、思想摂取の姿勢から、すでに青春期に胚胎せざるを得なかったのである。

② 「近代への懷疑」

若き橘は、実証主義の思考方法を基底にして、すでにニーチェから影響を受けて抱きはじめていた「近代への懷疑」について、新たにシュペングラーやカーペンターを通じてより現実的かつ具体的に認識を深めていく。

すなわち、シュペングラーについては、橘自身が「資本主義物質文明を評して世界に於ける冬の時期であると唱へてをる」思想家として紹介し、また同じくカーペンターについても、「現代資本主義物質文明社会を最も甚しき病態なりと論評」した思想家であると紹介しており、またシュペングラー自身、「賃金争議とスポーツ競技場との形をとって現代に再現している『パンとサーカス』(Pamemet circenses)。すべてこれは、最後の終結した文化に対し、田舎に対して、全然新しい末期的な、未来のない、しかも不可避免的な、人間存在の形式をあらわすものである」としているように、橘に対して、近代ブルジョア合理主義や資本主義社会そのものに対する懷疑をより一層深く抱かせた思想家たちであった。このことは、ラスキやトルストイについても、橘がシュペングラーやカーペンターと「同じやうな思想の表現に接せざるはない」としている

(22) 前掲『農村学』第1編緒論。オスヴァルト・シュペングラー(村松正俊訳)『西洋の没落』(縮約版)37頁。

ように、橋にとっては同じ分野の思想家であった。²³

このうちシュペングラーについては、「没落のうち、その輪郭の最も明確なものは、われわれに先だつ『ギリシャ・ローマの没落』である。ところが経過と寿命とにおいて、まったくこれと軌を一にする出来ごとが、次の一千年の最初の数世紀を占めている。これはわれわれ自身の没落であり、『西洋の没落』である²³」としているような発想方法を学びとり、のちに橋が、奴隸制期のギリシャ・ローマと同じように、自らの思想的基軸である近代資本主義の破産性＝土の破壊者論として提起していく上での、まさしく思想的アナロジーの対象とした思想家であった。

また現代社会を「病態化社会」とみる橋にとって、カーペンターこそ、その最大の思想的拠所であった。カーペンターの文明論とは概ね以下のである。まず、社会進化の過程でその初期は、「文明以前の人々の状態が（中略）一層健全であった」が、現在は、「種々雑多な、激烈な疾病——肉体的、社会的、知識的及び道德的——が現はれ」ている。つまり現代文明は疾病状態なのである。カーペンターによれば、健康とは、「肉体が一完全体であり、統一した状態にあって、或る中心の力がそれを維持していることを意味」し、したがって疾病とは、「その統一が破壊——又は崩壊して分裂した状態を指す」のである。つまり「健康——肉体上及び精神上の——とは、統一を意味し、不完全に対する完全を意味する」ものなのである。そして「自然を否定すると共にあらゆる種類の疾病が発生して来る」というのである。

ところで、社会に眼を転ずると、「財産を基礎として建てられている文明なるものの仕事は、あらゆる方法で人間を分裂させ、腐敗させること、——文字通りに腐敗させること、人間の性質の統一を破る」ものでしかなく、「あらゆる形式の奢侈贅沢、貧困及び疾病等」に取囲まれて人間らしい社会とは殆んど認め

²³ 同上『西洋の没落』（縮約版）76頁。

られない、破壊され且つ衰退した社会」になってしまっている、とする。つまり、私有財産制が統一を破壊し、疾病状態に至らしめているとみるのである。

それでは、この疾病状態から脱却するにはどうすればよいか。カーペンターは言う。「自然及び人間生活の共同一致に戻」ることであり、「失はれた楽園に帰ることである。否寧ろ新しい楽園に向って前進することである。(中略)失ったところの健康を取戻す為めには、将来はこの方向に向はなければならない」と。それでは、その方向の社会とは何か。「自然に接近した新しい社会生活(中略)これは文明が(中略)常に嫌って来たところの共産主義である」。すなわち、解答は自然に回帰することであり、つまるところ原始共産制であった。「そのとき相互補助と結合とは自発的で本能的なものとなる」とするのである。²⁴

カーペンターによると、現在の道徳さえもが「金銭関係を土台とし」ており、所有観念が根底的要素となっているとする。したがって、新しい道徳は、「共同生活を一般道徳の根底的要素となすものと認めること」にあらねばならないと言うのである。²⁵

以上のように、カーペンターの言う社会の健康を取戻すための目標たる共産制社会とは、とりもなおさず自然への回帰であったが、橘にとっては、さらにその上に、その哲学的前提としてベルグソンやジェームズのような実証主義、精神主義的「革命」論をおいていたのであるから、必然的な結果として、カーペンターを継承すれば原始回帰的な農村社会とならざるを得ない。事実、橘の唱道することになる人類理想の農村社会とは、「土への回帰」をひたすら叫びつづける非現実的な世界にすぎなかったのである。

③ 「近代の超克」への試み

24 カーペンター(富島新三郎訳)「文明——その原因と救済——」(『世界大思想全集 32』) 26頁・27頁・34頁・39頁・38頁・46頁・51頁

25 カーペンター(富島新三郎訳)「新道徳」(『世界大思想全集32』) 121～3頁。

カーペンターによって、自然への回帰、事実上、原始共産制社会の実現こそが病める近代社会を「超克」する道であると唱道されたが、さらに橘を惹きつけた「近代の超克」の思想は、タゴールであり、クロボトキンであり、そしてベスタロッチであった。

まず、社会関係から解放された個人、社会関係から切り離された農業社会を「実現」していく上で、橘の関心を惹きつけた思想は、タゴールの東洋回帰の思想であった。たとえば、橘が関心をもったであろう論点について、タゴールの随想「森の宗教」をみると、その特徴は、西洋については「宮廷の人工的な生活——忘恩的な裏切りと嘘偽の生活」と痛烈な酷評を下しているのに対して、東洋については、「自然な森の精神の生活」であって、楽しく、危険のない世界という礼賛を与えている点である。また同じく随想「文明の危機」においても、「不正によって、人は榮え、望むものを得、敵を征服する、けれども根本においては滅びている」として、現代文明の退廃を暴き、そこから脱却の道として「森への回帰」を説いている。²⁶⁾

近代＝西洋（資本主義社会）への懐疑論に加え、タゴールのこのような非近代的世界＝東洋への回帰という思想に接することによって、若き橘は、その思想を一層印象深く脳裏に刻みこんでいったものと言うことができよう。

カーペンター、タゴールとともに、「近代の超克」について青春期の橘をとらえ、その後の橘の思想と行動に色濃く事跡をのこしたのは、クロボトキン相互扶助の思想であった。すなわち、クロボトキンの相互扶助論の骨子は、「相互扶助的傾向を基礎とした諸制度が最大の発達をとげた時代がまた芸術・工業及び科学においても最大の進歩をした時代」であり、したがって「相互扶助的要因が（中略）動物界及び人類社会の進化において演じている絶大な役割を示すことが必要である」という点にあった。²⁷⁾クロボトキンは、このことを原始未開

26) 『タゴール著作集 8』111～2頁・248頁。

人の時代から歴史的にあとづけているが、橘は、このような相互扶助論を二つの面でのちに活用する。一つは、兄弟農場経営や愛郷会における共同精神や相互協力の発揮であり、他の一つは、客観的には階級対立なき村落上層支配のための村落共同体慣行を維持するための利用であった。

さらに橘がクロボトキンについて関心をもった論点は、「無政府主義は、自然科学に於ける知的運動の必然の結果である」という点であった。ここでいう科学とは、事実そのものの総括であり、無政府主義は、自然としての人間、人間社会を研究した「科学的」結論なのである。そのことを前提とした上で、クロボトキンは、「国家権力は（中略）有害無用な上部構造に外ならない。その上部構造は地主主義、資本主義及び官僚主義の利益の為に築かれて、而して既に古代に於てはローマ、ギリシャ、その他曾て東方又はエジプトで繁栄した多くの文明の中心地の崩壊を惹起したものである」とする⁹²。このようなクロボトキンのプロレタリアートの役割が欠落したアナーキズムは、橘に対して、ギリシャ、ローマの破農性とその崩壊、資本主義の破農性とその崩壊、この両者を結合させて、精神主義的な包帯で結ばれた原始回帰的な農村社会をさらに理想とさせる重要な要因となったものと言える。

以上のようにカーペンターやタゴールの自然あるいは東洋への回帰論、またクロボトキンの相互扶助論やアナーキズムなど、いわば「近代の超克」論に加えて、近代社会を構成する個別的な人間、とくに農村共同体に居住する周辺の人々を対象とした啓蒙の方法として、ペスタロッチの思想が橘を惹きつけたものと言える。ペスタロッチによれば、「人類の諸々の家庭的関係が最初にしてまた最も卓越せる自然の関係であり、職業教育や階級教育は、「人間の力とその知恵とを人類の特殊の地位と事情とに応じて練習し、応用し、また使用する

92) クロボトキン（室伏高信訳）「相互扶助」（『世界大思想全集34』）233頁。

93) クロボトキン（八太舟三訳）「近代科学と無政府主義」（『世界大思想全集34』）92頁・93頁。

こと」にすぎず、「かかるものは常に人間教育の下位に置かれねばならない」とする。²⁹ 橘は、こうしたペスタロッチの人間教育論を、近代を超克し「自然の關係」に回帰していくための人間教育＝愛郷塾の結成による塾生の育成、結果的には「国家改造」計画実行要員の育成という思想の具体化・実践化（近代への反逆）に援用していくのである。

④ 「近代への反逆」

これまでみてきたように、「近代への懷疑」と「反近代の思想」で覆い包まれて形成されつつあった青春期における橘の思想は、次には北一輝の具体的・現実的な現代への「反逆」論＝「国家改造」論に接触することによって、一躍、現実味を帯びはじめる。すなわち、橘自身の「自己超克」（その第一歩が帰農）と現実社会の「超克」への試み（兄弟農場経営や愛郷会の結成）に対して、北一輝は、橘自身の近代とともに「現代の超克」へ、さらに「反逆」へと導いていく牽引車の役割を果たすことになったのである。

北一輝の代表的な著作は、1906年の『国体論及び純正社会主義』、1915年の『支那革命外史』、1919年の『日本改造法案大綱』であり、最後の『大綱』は、橘26才のとき、すなわち、帰農後4年目に刊行されたものである。³⁰

そのうち、若き橘が最初に読み耽ったと言われる『国体論及び純正社会主義』は、国家主権にもとづく君主制統治形態を主張し、若干の反資本主義ポーズを示しながらも、実はクーデターにもとづく「国家改造」を宣言しようとするものであり、また日露戦争を讃美し、軍国主義を正当化する一方で、反戦平和主義を慢罵するものであった。次いで、丁度、橘が一高を中退して帰農する

(29) ペスタロッチ（溝上茂夫訳）『隠者の夕暮』（『『隠者の夕暮』とその瞑想』所収）181～2頁・189～90頁。

(30) 拙稿「〈研究ノート〉日本の急進ファシズム——北一輝の思想によせて——」（『富大経済論集』28巻3号）参照。

1915年に刊行された『支那革命外史』は、中国の統治者論を演繹して日本の天皇親政・軍部独裁を正当化するもので、同時にアジア「解放」（アジアにおける日本盟主）論を展開したものである。反近代（反西欧）と東洋回帰を脳裏に刻みこんだ橘にとって、この議論は確かに爽快であったにちがいない。

さらに、帰農後の読書として橘の関心を惹きつけたのは、『日本改造法案大綱』であった。この著書こそ、北一輝の集大成であり、まさしく軍部中心によるクーデターにもとづく「国家改造」計画実現をめざすものであり、多くの青年将校や井上日召ら民間ファシストたちの心をとらえたように、橘の非合理主義的「革命」観に何らかの影響をおよぼしたに相違ない。事実、橘は、この「改造」論に対して軍部独裁が主眼で農民が看過されていると反発していたが、⁽³¹⁾ 実際には、5・15事件の行動で示されていくように北の「改造」論に追従することに帰結するのである。

Ⅱ 思想基盤の構築——「現代の超克」への試み——

(1) 兄弟農場の経営

これまでみてきたように橘は、「近代の超克」の思想を身につけて、以降、帰農を起点に、すでに独占資本主義段階の日本資本主義という現実世界に向かって「超克」していこうとするのである。事実、この時期の帰農の理由について、「私はかつて哲学を研究せんと志して第一高等学校文科哲学部の方へ入学致した事があります。そこで私は文字通り寝食を忘れて哲学研究に没頭した事がございました。実はその結論の結果でもあったのですが、私はどうしても帰農せずんばをられなくなったのです。理由とする所はなんでもありません、今しがた申し上げた通りです」として、「日本は過去たると、現在たると将たまた

(31) 『現代史資料4 国家主義運動（一）』113頁。

将来たるとを問はず土を離れて日本たり得るものではない」という点を示している。哲学「研究」の結果が帰農なのであり、「研究」成果は、まさしく「土への回帰」の思想であった。

1915（大正4）年12月、茨城県東茨城村常盤村新立で3町歩の農業経営を開始し（22才）、翌年12月に結婚する。1917（大正6）年6月には親友林正三（東京美術学校卒）が帰農して橘の農場経営に参加し、次いで、次兄橘徳次郎、林正五（正三の弟、橘の妹と結婚）も帰農して参加した。経営規模も3町歩から7町歩に拡大し、1920年代には兄弟村農場とか文化農村とか呼ばれるようになる。⁸² 雑草の繁茂のために経営が破綻するのを防ぐため、雑草退治は家畜をもって草土を制するということを念頭にして、デンマーク農法、すなわち機械化農業による酪農経営への転換と、それに基づく小農の協同組合的経営、「乳牛畜産の日本農業化」をめざしたのである。その理論づけが、のちに橘自身の著書『農村学』や『農業本質論』によって与えられる。1926（大正15）年6月には、長兄鉄太郎も帰農して兄弟農場に参加することになった。

まさに、そこにはカーペンターやクロボトキンの描き出す牧歌的世界、田園のハーモニーがあるが、現実には、橘の述懐するように「ありの如く、みつばちの如く働き続け」ねばならなかったのである。そして1927年金融恐慌から昭和恐慌下での農業恐慌に直面するに至る。

（2）権藤成卿の影響と農本主義

① 権藤成卿のプロフィール

権藤成卿は1868（明治元）年に久留米の医者の家系をもつ地主の権藤直の長男として生れ、善太郎と名づけられた。権藤の人格形成に影響を与えたのは、1886（明治19）年の中国旅行であり、1890（明治23）年以降、武田範之ら日韓

82 松沢哲哉前掲書巻末「伝記年表」

問題に関心をもつものたちが父直のもとへ集まるうちに、成卿も大陸問題への関心を漸次深めていった。その後、武田らとともに対島漁業事業に参加するが、経営に失敗して借財を残し、1895（明治28）年妻子を残して家出、長崎春徳寺で傷心の生活の中で独学をつづける。

一方、日清戦争後、中国革命同盟会の孫文や宗教仁らと知り合って一層大陸問題に関心を深め、1901（明治34）年に内田良平らを中心に設立された黒龍会との関係を深めていく。そうして中国人向け漢文雑誌「東亜月報」の編集に従事するのである。このようなとき1904（明治37）年李容九、宋秉駿ら親日派朝鮮人を糾合して、満州開発策の自治財団である一進会が会員100万人を目標にして結成されたが、孫文もこの会を支持しており、権藤も日韓合邦という理想国家を実現する手段であるとしてこれを支持した。しかし、1910（明治43）年日韓併合が行われると、一進会に用済みとして解散命令が出される。権藤は、失望の中で黒龍会からも離れ、深い挫折感を味うに至るのである。

権藤の行動が再開されるのは1917（大正6）年のロシア革命後からであり、橋の帰農後で兄弟農場の経営に乗り出したころであった。⁸³まず1918（大正7）年結成の老社会と関係を深め、1920（大正9）年に自治学会を創立して、同3月には権藤の危機感の表明でもある『皇民自治本義』を刊行し、1910年代までのアジア「解放」論者から農本主義者へその軸点を移行させていく。以降、農本主義普及のための著作活動は、1927（昭和2）年『自治民範』、1932（昭和7）年『農村自救論』、『君民共治論』、1936（昭和11）年『自治民政理』などの発刊にみられるように活発につづけられるのである。

橋が帰農後に接した権藤思想は、1920（大正9）年刊行の『皇民自治本義』（1927年刊行の『自治民範』の後篇として、のちに収録）であったが、すでに、この頃までには、橋は帰農の理由にもあげているように「土への回帰」と

83 滝沢誠『権藤成卿覚之書』1～4章参照。

いう思想を自ら形成していた。したがって権藤のこの『皇民自治本義』によって一層自己の信念に確信を深め、いよいよ文字通りの農本主義者としての立場を明確にしていくのである。そこで橘に影響を与えた権藤の『皇民自治本義』³⁴について、まずその概要をみておきたい。

② 『皇民自治本義』の概要と特質

『皇民自治本義』は社稷、民性、自治、君民一体（君民共治）および明治以降の「近代」化批判等の諸論（八編）から概ね構成されている。第一に社稷については、権藤は次のように言う。「国は社稷の上に建設されて居る。農本は国民大多数の意」であり、「社稷は国民衣食住の大源である。国民道徳の大源である。国民漸化の大源である」と。社とは土地、稷とは五穀の意味であるが、「要するに土地なければ人の住むべき処なく、稷なければ、人の食すべきものなきわけ有る、上古の『マツリゴト』は支那も、日本も同じく社稷を基礎としたものである」とし、「元来国が社稷を基礎として建設されたるものなるを以て、統治者にあれ、被治者にあれ、苟も社稷観念を失却すれば、其一面なる自治の郡邑に勢力抗争の弊害を生じ、一面なる政府の内部に権力独占の弊害を生ずることになる」として、社稷こそ国家の基礎とすべきであると言うのである。このような社稷国家論に加えて、「地を重視する観念は、取りも直さず愛郷の観念である。愛郷の観念は取りも直さず愛国の観念である。此故に古来強大なる邦国を建設したるものは、農業の人民で有って、遊牧の人民ではない」と愛郷・愛国論と農業強国論を唱える。このような社稷国家、愛郷・愛国観念の唱道は、すでに「土への回帰」論を抱いていた橘にとっては、まず心強い援軍であ

34 『皇民自治本義』については、同じく権藤成卿の著書『自治民範』の凡例に、「本著大正八年五月稿を起し、十一月業を終へ、後篇八講は、皇民自治本義と題し、自治学会之を刊行し、（中略）前篇と共に之を合輯し、是に題して自治民範と云ふ」とあるので、この後篇を検討した（同書9頁）。

と考へたにちがいない。³⁵⁾

第二に民性についてであるが、「百般の公則は、必ず民性を基礎とすべきものである。苟も此の民性を無視して、制度組織を立つれば、其国は必ず敗滅するものである」とし、「古代已に一井一伍一邑一落。自然の衆団が出来、其衆団の中に共済共存の規則が成立し、其共済共存に有害なる個人都ての行為に向て制限を加へ、此の社稷の構成を見ることとなつたのは、実に我建国の最大要素である。共存共済は、只だ自治道德の力に依りて保証されるものである」としているように、民性にもとづく社稷の形成こそ建国の最大要因とするものであった。つまり民性とは、権藤によれば「古代から自然にできた村落共同体」で共済共存の規則が成立し、それが自治や道德の力で保証されつつ形成されてきたものと言うのである。

さらに「自治の要則は、決して民衆の生活と相離る可からざるもので、生活を離れては、自治もなければ、道德も認められぬ」と生活と自治の密接な関連を説き、次いで社稷と自治の関係については、「個人は個人自ら修め、郷邑は郷邑自ら治め、其郷邑集まりて州郡をなし、社稷を成し、邦国を成し天下をなしたるは、実に我建国の皇猷にして、立憲の要諦である。我日本は建国の始より、社稷を重んじ、祭教の基礎を此に置き、今日に至る迄、微ながらも其例制が保続されて居るのは、我國民の系統一貫せる權威である」とするものであった。しかし、その後「治乱休戚、風教の変化、思想の混濁、貴賤尊卑の隔離、貧富劳逸の差違物に依り事に依りては、遂に純正なる民性を破却し、隋て生ぜし弊害が却て常慣となり、其上に法律規則が制定されて一般民衆も全く其根本的に是に気が付かぬ迄になつて居る」として、現今市町村の自治のゆがみから本来の自治と民性が破壊されているとするのである。³⁶⁾

そこで、第三に自治についてであるが、その大旨は「民衆の自ら経営し、自

35) 権藤成卿『自治民範』255頁・260頁・262頁・264頁・245頁。

36) 同上書200～1頁。

ら扶持共済し、自ら防衛し、自ら存活進歩すべき社稷の典範を保続し、常に治乱両面に処する覚悟を立て置くのが、根本の趣旨である」として、あくまで社稷を守りぬくことを自治の中心におく。自治の組織については、その組織が「完全になれば、自治団中に於ける徳義の制裁は、必ず厳粛に行はれるもの」であり、そして「郷団の自治は、国の基礎である」が、「此の自治の意義を没却したる現行の自治制は、名は自治であるが、実が添うて居らぬ」と批判する。つまり「自治の組織が完全になれば、郷団の徳義が向上する、郷団の徳義が向上すれば、全国民の徳義が向上する、全国民の徳義が向上すれば、人道の問題の如きは言はずして可なりである」とするのである。

社稷を基礎にした本来の自治こそ自然な姿であり、それには「民衆の共存を信条とせねばならぬ」とし、また民衆の共存は「労逸の均平と、衣食住物資の調斉に依って、公正を保ち得らるゝものである」とする。しからば民衆の共存や「労逸の均平」とは、どのような郷団の規模であり、どのようなモデルがあるのか。これについては、「自治の区画は、必しも大なるを要せぬ、簡易なる共同治安の行届く範囲に限定す可きものである」とやや具体的規模を述べるが、その理想として、「班田制に『凡五十戸為里』とあるは、概則を示したもので、時代に依り多少の変化あるは固よりなるも、大体の要則は古今を一貫したものである」と述べ、なんと大化の改新に範をとるのである。

このように権藤の描く自治とは古代への回帰を特色としており、したがって明治以降の自治については、「明治の輔弼者も、後には地方自治の制を布いた、国会も開いた、けれども其割出しに聊か間違がある、即ち国家主義と吏僚の政權維持とを混同し、其暗翳が頭脳の中に横はって、凡ての制度を其れから割出したために、自治が国家の基礎であるべき原理を顛倒し、行政の都合上より自治制を設定し、一方民性自然の要求を無視し、不相応なる外国の模倣に日も亦た足らざるの有様」となったと嘆くのである。

このように権藤の自治とは社稷成員の結合形態であり、中央集権や官治組織³⁷⁾に対立して、社稷を基礎とする古代社会の自治へ復帰することにあつた。

第四に、社稷を主義とした民性と自治の上に君民一体（共治）を主張する。すなわち「君民の共に重んずる所は社稷である、社稷を重んぜざる民は民でない、社稷を重んぜざる君は君でない」として、まず社稷と君民について語り、次いで「若し社稷を度外視して国民と利害を異にする一階級を設け、之れに特種の利益を与え、之れに特種の権力を附し、国民の或者をして其の特種の権力の下に隠れて、悪事非行をなすの便宜を得せしむるならば、其の特種の権力者は、之を国家と名くるも、民国と名くるも、若くは大統領若くは帝王と名くるも、其利害は必ず国民と一致するを得ざるものとなる」として、社稷を軽視する権力や階級は国民の利害と対立せざるを得ないとする。それ故に「日本の国体は、君民協力して唯だ社稷のためにするあるのみで有る。此の社稷の二字は実に万古不文の憲法なのである」と断言するのである。いわば君主制社稷国家論の主張であった。³⁷

以上のような社稷を基礎とした民性と自治、君民一体にもとづく「古代回帰」的国家に対して、第五には、明治以降の「近代」化批判に及ぶ。まず、それは、「社会主義、無政府主義、共產主義等、各其主張学説を樹立して、相当の勢力あることも知らるゝ、而も其各主義よりして、労働問題も起り、革命問題も起り、又其各種の問題が、或る動機に依りて凶猛なる行動ともなり、危険なる反応ともなることが分る、凡是等の主義主張問題学説の、平和地域に侵蝕し来りて、人心の変化を激成して已まざる原因は、必ず自国の弊害裏に在ることを認むるのである、謂はば自国の弊害が、外国よりする他の思想を迎へ入るのである。而も其自国の弊害とは純正なる民性の要求に乖叛せる、衣食住の不安固、男女の不調和に外ならぬのである。彼の露西亞の共產思想が、忽ちの間に独逸二国を風靡し、漸くにして西欧各国に侵蝕し、英米二国までも其波動を蒙れる実況は、いずれも富力の偏僻が多数民衆の衣食住を圧迫する反動であ

37) 同上書263頁・239～40頁・540頁・238頁。

38) 同上書278～9頁・530頁。

る」と述べているように、明らかに1917年ロシア社会主義革命とそれ以降の世界と日本国内における労働運動・社会主義運動・民族独立運動などに対する危機意識から生れたものであった。これに対抗すべきものとして、「日本は、社稷の上に建設されたる国なれば、社稷を措いて其国は理解されぬ。明治以来一般日本の学問界に社稷観が衰亡したのは、学者が東洋に注意せぬ様になった結果である。我國民は此の根本問題に向て深切丁寧なる注意を払ひ、後進子弟を導かねばならぬ。我国は実に社稷の上に建設されて居る、故に農本である」と、改めて社稷＝農本主義国家を力説するのである。

そのためには「我が大化革新の大業が（中略）此千年の模範を垂れたのは、決して我國民の忘却することは出来ぬ事跡である」として、大化改新時代への回帰に期待を寄せる。また、今日のような社稷国家から大きく乖離した状況を生んだのは、「開国進取の唱道者共が、忽ちにして欧米崇拜の乱痴氣漠となり、模擬の儀飾に腐心して、鹿鳴館時代の狂態を描き出し」たからであり、さらには「我国体を畸形体に説」き、その上「吏権万能を夢み、煩雜極まる階級に特権を設け」るなど、「社稷の典範を伐賊せるもので、倘し世間に危険思想なるものがありとすれば、先づ是れ位の至危至険凶惡寧猛なる思想はあるまい」としているように、集団の結合原理も成俗も異なる欧米を崇拜し、我国体を奇形視してきたことにあり、とりわけ特権階級の設定と社稷にもとづく自治軽視とにその主要原因があるとするものであった。³⁹⁾

このように権藤の説く日本とは、社稷を基礎に建設されるべきものであり、元来、社稷の体系が存在し、それへの回帰こそ必要だとするものであって、日本の「近代」化こそ、日本社稷体系を破壊してきたものとして批判すべき対象であった。以上のような権藤理論こそ、農業経営に乗り出し、「現代の超克」を試みようとする橘にとっては、まさに我が意を得たりとするところであつたに

39) 同上書203頁・255頁・272頁・274～5頁。

ちがない。一層の確信をもって次には愛郷会の結成に向うのである。

(3) 愛郷会の結成

自ら身につけた「土への回帰」の思想と権藤の社稷国家論の影響の下に、1927年の金融恐慌から世界恐慌というきびしい社会情勢を背景として、橘は1929（昭和4）年11月に愛郷会を結成した。

その創立目的は、発足宣言にあるように、⁽⁴⁰⁾「愛郷会とは（中略）愛郷者の何者を以てしても犯す事の出来ない神聖にして鞏固不拔な団結に外ならない。だから、愛郷者なくして愛郷会なく、愛郷会なくして愛郷者ない。愛郷者と愛郷会とは同一にして不二だ」ということにあり、農民に愛郷精神を自覚させ、その枠内で団結させることにあって、きわめて精神主義的な点におかれていたものと言える。そして、ここには、権藤成卿の唱道した愛郷＝愛国論と、マルクス主義の革命（資本主義社会の廃棄）論とは異なる農本主義の革命＝精神の革命論（ベルグソン）、および農民とは危機意識に甚々にぶく目覚めにくいというニーチェ的衆愚意識とがあらわれている。

しかし、それでも愛郷会の支部は、主として那珂、久慈、東茨城、鹿島、行方の方面に結成され、1932（昭和7）年3月までに24支部、会員約500名に達した。その主体は、元愛郷塾生によると、「愛郷会支部を作ろうと賛同して集まってくる人たちは、殆んどがその村、部落なりの指導的立場に立つ人びとであり、つまり「地主層ないし自作層の地方農村の中にいて、比較的経済的に恵まれた部類の人びと」であった。これとは対極の「底辺の小作する人びとや小作する土地もなく、転々と土方工事などでその日その日の糧を求めている人びと」がおり、彼らは「偉い先生の話など聞いてみても腹の足しにならぬ」階層であって、それらは「今までの孝三郎の全く未知の世界」なのであった。⁽⁴¹⁾つま

(40) 豊島武雄『橘孝三郎』34～5頁。尚、豊島氏は、愛郷塾に入塾し、橘門下として活動しただけに、当時の模様を語る同書にはリアルなものがあると言える。

り農民下層からは余りに精神主義的なあり方への疑問が提示されていたのであり、また橘が農村、農民のきびしい実態に対していかに疎かったかが窺われる。

したがって、やや具体的な活動を採用していく必要にせまられ、1931（昭和6）年1月に愛郷畜産購買販売利用組合を創立し、愛郷会を農民団結の根幹にして、都市（商業資本）の中間搾取を排除して会員の経済活動に生気を注入していくことをめざそうとしたのである。このような愛郷会と利用組合の運動は、その後、合法運動としての請願運動に継承されていく。

Ⅲ 『農村学』の提起と政治運動

(1) 『農村学』の概要

『農村学』は、橘の青春期における思想形成と帰農後の営農とで、あるいは権藤思想との接触で培われた思想の一つの集約である。1930（昭和5）年末に完稿、翌31（昭和6）年4月に刊行され、愛郷会運動の理論的バックボーンとなったものである。⁽⁴¹⁾

刊行の目的は、「日本の現状はあまりに中央都市的に動かされつつある」として、「農村を正しき農村に改造すると共にそれを土台としてそれを出発点として明日に於ける完全全体国民社会建設に向ふべき改造運動への指導原理をつかむこと」におかれていた。この場合、変革（「改造」）の主体としては、「日本とその農村、それは水魚である。若し農村が涸れるならば、日本と云ふ国民社会の存立は立所に否定されなくてはならない」として、「日本の農村を救ふべきものが農民自身であったならば、瀕死日本を救ふべきものもまた農民自身の

(41) 同上書39頁。

(42) 橘孝三郎『農村学』は、正確には「前篇」と記されているが、後篇の刊行はなかった。「日本国民社会病態病原学としての日本国民社会経済の農村学の一研究」という副題をつけ、第一編緒言、第五編結語を含めて全五編よりなるものである。

力による外ない」というように農民を中軸に位置づけ、プロレタリアートの歴史的役割については評価しようとしなかったのである。

第1編「緒論」では、「工業ばかりが経済生産の全部でない」として、改めて「農村を日本存立の基盤」と位置づける。そして歴史的に遡って古代ローマの発展と崩壊の基礎について、「ローマがギリシャと異なり強大比ひなき大帝国を出現せしめたのは、ギリシャが純然たる通商的都市国家たるに反して、農村国家だったからである。即ちローマはそのすぐれた農業を以て植民政策に成功した」が、ローマの崩壊も「ローマ固有の自作農を農村より都市に追い出し（中略）ローマ帝国存立の生命の糸を自らの手によって絶ち切らざるを得ざる状態に立ち至ったがために崩壊せねばならなかった」と述べた上で、現代資本主義についても、「英国の明日はローマのそれである」とし、アメリカ、フランス、ドイツも「土に還らざるべからざる事情に於て」同じ運命にあると説くのである。

第2編「生産二次性原理」では、「現象界を生命ある者の次界と生命なき者の次界の二に大別して考える事が出来る」とし、「前者に対して活力的次界と云ふ文字を冠し、後者に対して幾何学的次界と云ふ文字を冠せしめ」としてベルグソンの現象界二次性原理を援用し、橘自身の生産二次性原理を次のように展開する。すなわち、「我々は我々の生産に於て生命ある物を取扱ってをる次界と、物質を取扱ってをる次界の二者ある事を認め得る（中略）生命的対象を取扱対象とせる所のものは農業であり、物質を取扱対象とせる所のものは工業である。そして生産は常に農工による二次性を有するものである」として、「私の称する生産二次性原理と申すはこれである」とするのである。

そして「農業は productive であるが工業は sterile である」として、農業の小経営と非機械化を次のように唱道する。すなわち、「農業経営形態の最も大なる特徴はそれが飽くまで家族主義小経営であり、「農業は決して近代工業のとれるような方法の下に機械化され更に大産業化さるる事によって破壊こそされ革命さるものではない」く、したがって「日本農業の産業革命的な農業革命

は絶対的に不可能である」とするのである。このような日本農業にとってデンマーク農業こそ重視し模範とすべき対象であり、それは「乳牛飼養を発達せしめた。それを中心として他の畜産を起した。そしてこれを可能ならしめた最大の原動力はその優越せる小農の純粹経済組合主義的共同運動に外ならなかった」として、小農経営とその協調主義を称揚する。

このように小農経営を中心とした農業こそ最大限重視することのできる産業であるとして、「農あって工あり、工あって農ある事またあらざるべからざる事」であり、「都市を造るものは村であり、農民を創るものは必ず市民を創る」と再確認して、「農工両者の調和破れんか此処に生産の破綻は必然的に来襲せざるを得ないのであって、それは直ちに生産停頓となり不況となり、恐慌となって現はれざるを得ない性質のものである」とする。かくて資本主義の破壊性について、「資本主義的破壊から全国民社会経済組織と全社会を解放せんと欲するならば何より先に農村社会を救はねばならぬのである。さすれば工業生産も救はれ、都市も救はれ全社会が此処に救はるるの端をつかみ得る」と論断するのである。

以上からの第2編での結論は、「土を離れて最も不安定極まる状態になげこまれた現代物質文明による人類社会は今や正に土につくの安定さに築き改められなくてはならない」とするにあった。こうして「現代の三大問題」として、以下、人口食糧問題、失業問題、日本国民社会経済合理化問題が第3編で論じられるという運びとなる。

第3編「日本と農村」では、第1章「人口食糧問題と農村」で、「マルサス主義的原因のみが米穀生産を左右する唯一の原因ではない」し、また「マルサス主義的説明のみが我々の人口食糧問題を説明するに足る唯一の解釈ではない」として、マルサス人口論を批判する。そして食糧問題については、「それを何処に探求すべきであるか。何処でもない先づ経済的社会的経済世界の領域に於てすべきであった」として、第2章「失業問題と農村」に移るのである。

この2章では「窮乏は何に原因してをるのであろうか（中略）我々の問題に

対する解説者の最も代表的なる一人に出会ふ。即ちカール・マルクスその人に外ならない」として、マルクスが槍玉にあげられる。すなわち、いわゆる「大農優越論」について検討に及び、「大農は小農を併呑してそこに企業の集中と大経営が起り、農業の工業化が行はれて、農民大衆のプロレタリア化が加速度に起る等の事情は、一般的には少しも起らなかった」として、むしろ「事実はその全く正反対であって、小農は常に大農より優越して、たとへその保護政策なるものがなかったにせよその地歩を歩一步堅からしめて大農に対立併進して来た」と言うのである。そして「時に小農は却って大農を圧倒してさへをるのである。特に農村国デンマークの如きはその最も顕著なる実例を提供してをる」といささかの得ないマルクス批判から、小農「優越」論をデンマーク農業を拠り所に主張するのである。

こうして「土地の資本主義化は人類への墓穴である」し、「資本主義の農村延長は農村の破壊であり農業の衰退である」という論法に至る。かくて「日本は何によって亡びんとするか。そしてまた何によって救はるべきものであるか」が問題であるとして、第3章「日本国民社会経済合理化問題と農村」に議論を移す。

この第3章では、金肥依存農業への批判を展開して、「此処に日本農業の肥料自給策の提唱がある。畜産の日本農業化がある」とし、『『将来の社会的対立は三井三菱対農民である』(中略) 著者の同感もまた此処にある』とするが、ここでもプロレタリアートの歴史的使命を意図的に無視し、しかも農業機材など工業製品の値上りに対する批判もなされない。独占資本を農民の対立物と指摘しながら、それ以上に議論を深化させず、「日本農業の最大敵はけだし雑草に外ならない」といつの間にか外らしてしまい、「牧草ある所畜産なきはなく(中略) 畜牛畜産の、就中乳牛畜産の日本農業化に外ならない」としてデンマーク農業の重視が再度取りあげられ、「デンマーク小農は(中略)よく順応し更に直ちに活路を開き始めた」と賞讃して、そこに日本農業の活路を見い出そうとするのである。

そこで基本型家族的独立小農経営体なるものをとりあげて、「著者の日本に於ける基本型とする農家では先づ人員、主人主婦老人子供先づ六名の人員を有し、役畜一頭を有する耕地面積水田六反歩畑六反歩を以てせるもの」とし、「費用は金肥だけ」であるこの基本型経営について、「在来経営」型では、収入合計から金肥代差引いて568.81円（農家第1所得）であったが、「畜産を以て合理化されたる経営」では、同じ計算で差引き753.30円にもなったとする。「以て誤られたる製造工業至上主義へだけは冷水をぶっかける事が出来る（中略）要するに土を離れたる日本はない」と再びデンマーク農法を模した小農畜産経営による「土への回帰」を主張するのである。

第4編「資本主義と農村」は、権藤成卿「自治民範」（前篇）における明治以降の歴史と政府批判と概ね同じ内容で、専ら資本主義の破農性を中心に展開する。

第1章「近世資本主義の本質と農村」では、「一刻も早く現状を打開し、この急より日本国民社会を救ふと共に光榮ある新日本をその明日に打ち建てたくいはならない」とまず危機感を表明し、カーペンター思想を想起して「資本主義社会の恐るべき病態化が如何に歴史に於て典型的であるかは、蓋しローマに於けるのそれに最も彷彿してをる」と述べて、再びローマの歴史に言及し、「病根を資本主義の破農性に発見せざるを得ない」と断言する。「人類は永い間土をふみにじり、土に背いて来た（中略）その極まる所資本主義の徹底的破農過程に尽きんとして農村將に亡びんとしてをる。農村亡びんとしてまた資本主義社会はその最も恐るべき病態化の下に自己否定を行はずんば止まざらんとしてをる。かくて世界は再び土に還らねばならんのである。土に還って新なる歩行を起さねばならんのである」と、ひたすら「土への回帰」を叫ぶのである。

その方法と主体については、「資本主義的圧迫から自他一切を解放して、人類の明日を築くための基礎を形造るに価する農村社会を創造せんがために許されたる農民方法とは即ち他なし勤勞主義のそれであった」とし、「勤勞生活者の主体をなせるものは『土の生活者』だった」としており、あくまで農民中心

の皮相な変革論にすぎなかったことが、まず明らかである。そうして「一切を土の安定さに造り改め得んがために『土の生活者』は人類の明日を創造せねばならん、そしてそのために設けをかけたる方法は勤労主義であらねばならん。これ即ちとりもなほさず我々の勤労者社会主義或は勤労者国民社会主義のテーゼとする処である」としているが、その実、勤労者は「土の生活者」中心であり、勤労者社会主義という紛らわしい用語を使いながらも、あくまで「勤労者社会」主義という、きわめて抽象的なテーゼでしかなかったのである。

第2章「日本に於ける資本主義の発達とその農村」では、これまでの論法を日本に具体化させようとしたものであるが、その内容は、ほとんど同じ議論の反復である。すなわち、「日本に於ける資本主義的国民経済組織の発達をある比喻を以て説明する事が許さるゝならば、それは恰も一本の大木のようなものである。市場経済組織を幹として金融組織と交通組織を二大主枝として両翼に張り、その中央に産業組織を主枝として国際経済関係なる大空に聳へしめてゆく。そしてその基部主根をなすものは農業組織である」べきだが、しかし「資本主義経済組織が都市を基礎として中心として行はれ」てきたのが現実である。ふりかえてみると、「明治維新或は西洋文明の東洋波及及び資本主義の東洋浸潤は、それが本国たるヨーロッパ合衆国家内に於て行はれたそれと同じく、日本農民をも自由流動性へまで解放し（中略）封建農奴は家族的独立企業の形式の下にいづれも自己の責任による営利主義経済を打ち立て得るの幸運を迎へるに至った」が、その後、「都市に集中蓄積されていってそこに封建武力よりもなほ恐るべき金力支配の近世資本主義的なものを養って農村自らはその犠牲たらざるべからざる処終に死に至る迄搾取さるゝため以外の何物をも表はしてゐない」という現状に至っている。それ故に「農民本来の姿なる勤労生活の立場に還って、自利他利合一し得る共同体的調和社会を土の基礎の上に確立してここに新たな厚生主義時代を出現せしむるが如き事柄は歴史の明日へかけ置ねばならん理想であった」とし、かくて「資本主義の背土性、或は破農性とその農村荒廃こそはまた資本主義社会の病根をなすもの」と糾弾するのである。

第3章「農村に対する社会経済圧迫の種々相」では、「茨城県は（中略）県予算を議する幾十が一人として農民たるは無い」とし、「いづれも皆酒造家か然らずんば医者、弁護士の類である。申すまでもなく之等の人々は頭より爪先まで市民である」として、橘らの営農地茨城県を例にして反農業（民）政策とその主導者をまず追求し、これを以下四つの側面から検討していく。

まず、土地関係を第一にあげ、「地主のふところへ貢がれたるこの金（注…小作料）は、やがて地主の子供を大都会の大学へ送るために費される事がその用途の最善のものである（中略）そうして深遠なる學術ををさめ高い地位をかち得たるものが村のために如何におかげした事であるか（中略）小作料の実に年々七億なる巨大なる金額は村を離れて流れゆく所はどこか。かくて金力の重圧が加速度的に加はりつつ、一に村に偏圧加重されてゆく事實は、また現資本主義社会の最大病根の一たるを失はなかったのである」（カッコ内注は筆者）として、膨大な小作料が結局は破農的に使用されていくことを暴く。

次に金融関係を第二にあげ、まず「農家の負債（中略）推算の結果ははゞ五十億万円である。しかもその利子は常に平均一割と云ふ高利率」であり、「債務の主体は（中略）不動産抵当貸付による」ものであるとして、農家に対する金融的支配を論難する。そして、ここから吸い上げられた巨額の金が「念入りにも遠くジェー・ビー・モルガン商会の大金庫の中へまで運び去られてゆく」とアメリカ独占資本による日本農業支配をも追求して、日米両資本主義による破農性を暴いてはいる。しかし、それは単なる客観的分析に終っており、どう変革するかの見点は、あくまでも「土への回帰」という精神主義的なスローガンでしかなかった。

第三にあげている市場関係では、「日本に於ける金力支配の発展は（中略）日本国民社会経済内に下していったと同時に一方それは日本の市場を完全にそのカルテル化されたる販売網組織を以て統制してをる。そして申すまでもなくその一切を支配するものは金融支配力であり、一切を指揮するものは謂ふ所の財閥である」と流過程を通じての独占資本の農業支配を論じ、具体的な例とし

て「農耕の生命たる肥料（中略）この巨大な肥料の生産及び販売はいづれも三井及び三菱なる日本二大財閥の殆んど独占にかかってをる」と正しく指摘する。その他、独占による大土地の商品化や田畑売買価格の決定などをあげ、その不当性を突いてはいる。しかし、これらを通してみた橋の基本矛盾に対する視点は、あくまで独占資本対農民という主観的なものでしかなかったのである。

最後にあげている村の財政では、農家の諸負担として田畑負担の租税、国税、府県税、市町村税、戸数別および附加税、田畑負担の公課、協議会費、農会費、普通水利組合費、水害予防水利組合費をあげ、一戸当りで81円15銭となるが、これは「農家の支出中の肥料金に次ぐ最大項目である」と指摘した上で、改めてそれらの諸負担がどのような形で使われているのかを問う。その一例として「高等専門と更に大学——いづれも県費国費で支へられてるといふのだ——となると、それが日本の農民五百五十万戸の負債なしに支へらるるものではなかったのに反してあまりに忘恩的な働き方を農村に対して示めしてをる。それ等の諸学校は要するに中央を養ひ、中央に巢喰ふ大ブルジョアを養ひ、それを中心として動き、且つ動かされてゆく日本に於ける資本主義の成熟をして、日本農村を破壊せしめてゆく外の何物であり得たか」と高等教育機関のあり方を追求し、その反農村的性格を嘆くのである。

かくて第5編「結語」では、「我々は今や勤労生活を捨て、協力団結を解消し、土を亡ぼして自滅せんとしてをる（中略）我々は今や正に土に還らなければならない。そして一切を土の安定の上に築き更へなくてはならない。土に還れ、土に還れ。（中略）そのみが都市農村と全国民社会を救ふべき大道である。そしてそこからのみ資本主義社会に取って代るべき厚生主義社会⁴³⁾が生まれ出るのである」と、あくまでも「土への回帰」を叫ぶのである。

このようにデンマーク農法を範とする畜産経営を軸とした小農経営および協同組合的農業経営を推奨する一方、資本主義の破農性を突きながらも、結局は「発展」の視座を欠いた観念的な批判と「近代」否定論とで終始した。権藤の提唱する「大化の改新への回帰」と呼応したこのような「土への回帰」は、詰

まるところ「原始への回帰」に帰結していかざるを得ず、かつ現実を「発展」させようとする路線に対しては、結局、反動的な性格すら帯びてこざるを得ない性格のものだったのである。

以上の橋の所論に関する性格づけについて、さらに言えば、丁度、レーニンが経済学的ロマン主義者やナロードニキ主義者たちに対して行った批判を想定すると、より明確になる。すなわち、レーニンはまず、「商業と工業との発展が農業を追いこさないような資本主義が、存在しうるであろうか？」（傍点は原文、以下同じ）と問いかけ、「ロマン主義者は一様に、小生産を『社会組織』に、『生産形態』に転化して、それを資本主義に対置している。さらに、われわれが見たように、そのように対置することは、理解の極度の皮相以外のなにものをもそのうちにふくんでいないのであって、これは、商品経済の一つの形態（大産業資本）を人為的に誤って別に取り出して、それを非難する一方、同じ商品経済の他の形態（小生産）を空想的に理想化することである」と小ブルジョア的皮相性を明らかにし、次いで、「それはまさに、彼が小生産（彼が理想化している）と大資本（彼が攻撃している）との関連を理解してはいないということにある。すなわち、彼のとくに愛する小生産者や農民がどうして実際に小ブルジョアとなるのかということ、彼が見ていないことにこそある」としている。こうして彼らロマン主義者の願望が、「ナロードニキの願望および綱領とまったく同種のものである。すなわち、その願望は、まったく同様に、現実の経済的發展を無視することのうえに打ち建てられており、また、機械制大工業と氣狂いじみた競争と利害の闘争との時代に、古ぼけた旧時代の家父長

(43) 橋孝三郎前掲書第1編 3～4頁。

第2編 12・14・19・35・6・42・3頁。

第3編 63・67～8・73～4・90・102・134～9頁。

第4編 169・172・193～4・207～8・210・217～8・219・222～3・231～2頁・240・254～6・265・268～9頁。

制的諸条件を再生する諸条件を無意味に持ち出すということのうえにうち建てられている」⁽⁴³⁾として、その「回帰的」性格を明らかにしているのである。橘孝三郎『農村学』を貫くものは、まさしく経済学的ロマン主義の日本的再版であったと言うことができよう。

(未完)

(43) レーニン「経済学的ロマン主義の特徴づけによせて」(『レーニン全集』2巻199頁・212～3頁・217頁・233～4頁)。